

怒りの日  
その日、彼らの  
予言のとおり  
すべては燃え尽き  
灰となるだろう  
全てが厳しく  
裁かれる時  
その恐ろしさは  
どんなにか

(死者のためのミサ曲続唱 『怒りの日』ディエス・エラより)

## 1 \* CORVUS<sup>鳥</sup>

不思議だ。貴女には、顔がない。

コルウスがそう呟くと、彼女は眉をしかめ、下唇を突きだして、訝しげにコルウスを振り返った。

ある夕焼けの時刻のことであった。細く流れる雲が、落ちてゆく陽の朱を細やかに色分けし、うっすらと顔を見せ始めた月の、星の、曖昧な輪郭が、こちらを覗き見始める頃合いのことである。

振り返る彼女の背は高い。だから子供の身体をしたコルウスはいつだって、自然と彼女を見上げる形となる。それはコルウスにとってはもどかしい事でもあり、なにがしかのくすぐりたい、喜びの姿でもあった。

見上げたそこにいる彼女は、いつだって美しい。

濃い森の香り。歌うように響く虫の声。いずれも、最近までコルウスの知らなかったものばかりだ。けれどそれらの風景を、音を、温度を、全てを、彼女はいつだって、当たり前のように許容する。

陽を背にした彼女の表情は、逆光のためによく見えない。しかし可笑しそうに笑う声を聞いて、コルウスは小さく首を傾げた。

「なぜ笑うの」

「だっておまえが、突然おかしなことを言い出すものだから」

「顔がない、と言ったこと？」

「そうよ。私に顔が無いだなんて、随分不思議なことを言うのね。おまえには、私のこの目や口が、見えてい

ないとも言うのかしら」

いじけたようにそう言う彼女は、しかし気分を害した様子ではない。

風が吹く。彼女の豊かな黒髪が、ふわりと視界に散らばった。しゃらりと鳴る涼やかなそれは、彼女が身につけた、銀の足環の擦れあう音であろう。彼女の自由を制限するために付けられた、その足環のことすらも、彼女はけつて憎まない。「いい音よね」といつか話していたその言葉の穏やかさを、コルウスはよく覚えている。

「貴女の目の青がどんなに深いか、その唇がどんなに柔らかいか、僕はよく知っているよ。だけど、……そう、貴女は僕たちと違って、『普通の顔』を持たないでしょう」

「普通の顔？」と彼女が促す。コルウスは一つ頷いて、「そうさ」とまた言葉が続けた。

「僕たちはみんな、自分に与えられた顔をベースに、悲しい時には悲しさを表す顔をするし、嬉しい時には嬉しさを表す顔をする。だけど貴女には、そのベースとなる顔がないのだから。貴女はいつも笑っている。だけど、同じ笑顔は一度もない。毎日違う顔で、貴女はずつと笑っている」

それが僕には、とても不思議だ。コルウスがそう続ければ、彼女はふと足を止め、ほんの少し視線を泳がせてから、小さくコルウスを手招きした。そうしてコルウスの肩に手を置き、コルウスと視線を合わせるように、その場に軽く腰を落とす。

「上手に笑えているかしら？」

彼女の質問が、コルウスにはどうも不可解であった。笑顔のパターンに、上手いも下手もあるだろうか。しかしコルウスはその問いを口にせず、代わりに、「貴女の笑顔はとても素敵だ」と、思った通りに言葉を紡いだ。

「僕は貴女の笑顔が好きだ。この森には不思議な物が溢れているけど、その中でも一番、貴女の笑顔は不思議

で、素敵だ」

彼女が何やら目を伏せる。曖昧に笑うその口が、「ありがとう」と呟いた。

「まるで口説かれているみたい。コルウスったら、おませさんね」

「『口説く』って、一体どういう意味？」

「おまえはまだ、知らなくてもよろしい。……さあ、そろそろ町に帰りなさい。誰かに見つかったら大変」

腰を上げながら、彼女がコルウスの頬にキスをする。コルウスはそれが嬉しかった。母のそれとは違う、柔らかい、湿っぽい、そのキスは、いつだってコルウスの心を浮き足立たせてしまうのだ。

「また来るよ、イノリ」

彼女は最早、それを否とは言わなかった。ただ微笑んで、そつとコルウスに手を振った。

彼女に背を向け、慣れた森を歩き出す。今日は長居をしすぎてしまった。少し急いで帰らなくては。木々の茂みを掻き分け、大きなシダの葉を避ける。一部の壊れた鉄格子に手をかけ、ひよいとその外へ顔を出し、——コルウスは慌てて首を竦めた。鉄格子の外を囲むように走る道路に、スピードを出した自動車が走り抜けていったのだ。

危うく轢かれるところであった。コルウスはそつと安堵の溜息を吐き、今度は慎重に外の世界へ降り立つと、歩道のない道路を駆け、渡る。そうして道路の対岸へと辿り着き、もう一度大きな溜息を吐いた。今度は安堵のそれではない。現実を引き戻された、落胆のための溜息である。ふと振り仰ぐ町は鮮やかな電飾で色づき、背の高いビルの間を縫うように、人工義体に心を宿した人間達が町を闊歩している。

ある人は仕事を終え、急ぎ足で帰路につき、ある人は最近ようやく認可の下りた、生体犬を首輪で繋ぎ、誇